

り、学力の向上や複数の教員が授業をすることにより、子どもたち一人一人を多面的に見ることができ、初等部は「学級担任制」なのですが、初等部はまだ発達段階ということで学級担任制の方が、子どもたちもいろいろなことを相談しやすいということからそのようにしています。ただし、初等部でも音楽や英語といった一部の教科においては、中等部への橋渡しという観点から教科担任制としています。学級担任制と教科担任制の良いところをうまく組み合わせ、5年生から教科担任制を導入することによって、児童生徒たちも教員に対する壁がなくなり「中一ギャップ」もなく、スムーズに勉強に取り組むことができています。

——義務教育学校になってからもうすぐで3年になります。いろいろな課題や改善点なども見えてきたと思うのですが。

やはり9年間を同じクラスメイトと一緒に過ごしますので、人間関係の固定化という問題があります。本校では「初等部」「中等部」「高等部」と、それぞれのブロックごとで、

ブロック集会やブロック活動を行っています。また、スポーツ交流なども行っています。そのことにより、リーダーシップを発揮したりもし、縦の人間関係を構築することもできます。また、全校児童生徒一斉に、という取り組みはなかなかできませんので、ブロック間での交流の機会を多く取り入れています。

もう一つは主体性です。義務教育学校だからというわけではありませんが、児童生徒に「主体性を育む」ということが課題となっています。

自分で課題を見つけ、その課題解決に向かつて自身で考え、人に伝えたり行動したりする力を育てたいと考えています。授業でも教員が一方的ですと受け身になってしまうので、児童生徒が主体的になるような授業改善に取り組んでいます。教員が何か言うまで動かない、保護者に言われるまでやらない、ということではなく、自分からアクションを起こして、協働して解決していく力、それがこれから生きていく上で大事なことだと思います。

最後は、コミュニティ・スクールの課題です。地域の代表者や保護者教育・学校関係者などによる「学校運営協議会」を設置し、一緒に学校

づくりを行うコミュニティ・スクールを導入していますが、地域と家庭学校の三者が目指す子ども像や目標を共有し、協働するという面では、新型コロナウイルスのこともありますが、まだ弱いと感じています。地域や保護者の方も非常に協力的なので、そこに不満はありませんが、三者がさらに情報を共有して、一体的に教育を進めると、もっと子どもたちの可能性を広げることができます。地域とともにあるコミュニティ・スクールの制度を生かして、教育活動の充実、特色ある学校づくりを進めていきたいと考えています。

——庶路学園では、児童生徒たちにどのような成長を望んでいますか。

庶路学園の中で教育が終わるわけではありませんので、学校を卒業した生徒たちが、次のステージでも活躍できることを目指しています。9年間を同じクラスメイトと過ごしたため、高校へ行ったり、社会へ出てから適応できなくなるといったのは困ります。次のステージでも自分の良さや個性を生かせるように「自信とプライドを持つて卒業できるようなにする」ということが、私たち教員

1. 「教科担任制」で行われている2年生の英語授業の様子。小学校1年生の段階から外国語教育を実施し、世界に通用するコミュニケーション能力の育成を目指します。
2. 「4・3・2制」のブロックを生かした集会や学校行事などを通じて、児童生徒のリーダー性を育みます。

